

## 関関同立対抗グライダー競技会の発想から、実現まで

立命館大学監督 吉田 豊

翔友会の皆さん、初めまして、また、一部方々とは大変お久しぶりです。

立命館の監督をしています吉田です。

私は昭和44年卒で(1年留年しましたので本来なら43年卒となりますが)、当時存在しました飛行機班に所属していました。その関係で今も全日空でフライトしています。

同志社大学体育会航空部と立命館大学体育会航空部は、私が在籍していました当時から協力関係が密で、またライバル意識も今以上に大変旺盛であったと記憶しています。その頃の使用機材は、H-22、H-23C、三田-Ⅲ等が主力機で、現在の高性能機時代からみれば隔世の感があります。

当時の訓練場は、関西ではローカル空港の使用が全盛で、それぞれの機体を岡山、高松、鳥取、富山、あるいは旧鶉野などに陸送し、例えば、同志社、関大、関学の同期と技量を競い合った事が昨日の事のように、楽しく思い出されます。

また、窪田先輩が手掛けられ、今年で29回を迎えます同立対抗戦も、確か私が1回生の時、第1回大会が開催され、胸をときめかしたと記憶しています。

私事ですが2年ほど前に監督を引き受けるまでは、訓練現場からほとんど遠ざかっていました。しかしながら、同立対抗戦には機会を見つけ何度か顔出しし、学生達のフライトを眺めていました。ところが最近、各大学の航空部が抱える部員数減少の影響か、何とも活気に乏しい対抗戦のように映りました。お断りしておきますが、これはあくまで見る側の感想で、また個人的主観の問題であるかもしれません。確か、27回大会だったでしょ

うか、福井空港で最終日を観戦する機会がありました。この大会は、選手層の違いも歴然としていて、勝利は立命館のものとなりました。しかし、我々立命館としても内容的には全く満足のいく戦いではありませんでした。正に二校対抗戦のあり方を問われるもののように感じました。そのような時、教官をして頂いていた、学連田口教官、関大松浦監督と話し合う機会に恵まれました。いろいろな話をしている内、関関対抗戦の話題になり、部員数(選手層)の減少、授業、経済的負担の増大等、抱える問題は同じで、似たり寄ったりの内容である事が分かりました。特に活気、活力の乏しさについて、例えば二校で競い合う対抗戦の現行表彰制度では、準優勝校(敗戦校)であってもトロフィー、表彰状が立派に授与され、勝てなかった事への悔しさ、負けん気があまり感じられないように映っていました。現代気質と言ってしまえばそれまでかもしれませんが。

そのような事を話し合いながら、体育会航空部部員としてのレベルアップを図るためには、多くの部員を獲得し、先ず部内で競い合い技量向上を目指し、人より一歩抜き出ようとする意気込みと、負ける事への悔しさを持ってもらう事ではないかと言うような所に落ち着きました。そのためには、関関同立の4大学、現役、先輩が力を合わせ知恵を出し合い、問題解決に少しでも役立てばと言う事になりました。

そこで取りあえず、準備のためと言いますか、幹事役と言いますか、立命館が担当する事となりました。抱える問題に共通点が多く含まれていたため、福井での話し合いから時を置かず、2002年12月22日に、関大松浦監督の会社事務所をお借りし、第1回会合を持つ事ができました。

出席者は、関学斉藤監督(現総監督)関大松浦監督、同志社森川監督、同志社窪田顧問、立命館吉田の計5名でした。

先ず初めに、この会議の目的は、関西学生グライダー界の一層の活性化を目指し、ひいては、日本学生グライダー界の技量向上、組織活性化に少しでも貢献し、学生に最良の活動環境を提供する事としました。そして、関西四私大の関関同立が総力を結集し、スポーツイベントとして初の、関関同立対抗戦に結びつける事と、既存の同立戦、関関戦の今後の在り方についても検討する事としました。

進め方は、  
現状認識  
基本方針  
担当組織  
施策検討

に沿って行いました。

会議の結果、過去2回同様の会合が持たれたが、諸般の事情で中断した事が判明しました。しかし、今回は是非現状を打開するため、学生の授業、経済的負担減を最優先に考え、実現に向け各校努力する事で一致しました。

以降、会議の場を関大中川総監督の会社事務所に移し、中川先輩、あるいは、立命館渡部部長、各大学OB数名の力を得て、

日程  
開催地  
競技形態  
競技規則  
教官稼働  
対学連  
その他

等の内容に沿って、2003年5月、2003年7月、2003年9月の計4回開催しました。

その結果、正式名称を、

第1回「関関同立対抗グライダー競技会」

日時 自 2003年11月9日

至 2003年11月13日

場所 木曽川滑空場

と決定しました。また、現在行われている同立戦、関関戦については、4大学対抗戦に組み入れ、競技結果をもとに対抗戦勝者を決める案も出ましたが、取りあえず現行形態を維持し、今後のあり方については、検討課題とする事としました。

長い議論においては、当然の事と言いますが、意見の相違が散見されました。しかしながら、今回は関関同立による学生グライダー界の復権を目指すべく、最終的には一丸となる事ができ開催に至りました。

競技運営については、現役学生が主となり、同立戦、関関戦を参考に、監督、OBの意見を取り入れながら、教官稼働、競技規則等準備を整えました。

一方、今回の記念すべき関西有力4私大の第1回対抗戦のため、マスコミ対策をすべく、新聞各社、TV全社に接触を図りました。しかし、大会会場が、岐阜県海津町の木曽川滑空場で、当然ですが参加校全てが関西と言うのが、取材上の思わぬネックになりました。報道各社には、取材活動の縄張りの外的なものが存在するらしく、特にTV局が地盤以外の地で、カメラを回すのはよほどの事が無い限り出来ない状態よく断られ、ほとんどが、名古屋本社あるいは支社の窓口を紹介されました。それともう一点、決定的だったのが、開会式当日

の、11月9日が衆議院選挙投票日で、紙面、映像は選挙一色でとてもそれ所ではない、と言う雰囲気になってしまいました。そのような中、名古屋圏では、地元中日新聞が4段抜き見出し、上昇中のカラー写真付きで、

### 関西四大学が“空中戦” 海津でグライダー競技会

立命館、同志社の地元京都新聞社からは、スポーツ担当部長の井上さん自ら、木曾川滑空場までおいでになり、精力的な取材活動をして頂きました。その結果、1週間後の夕刊で3面の半分の紙面をさき、自身で撮影された素晴らしいカラー写真3枚を掲載し、見出しが6段で以下のように大きく扱ってもらえました。

### 関関同立 合同強化計画が“離陸” グライダー初の定期戦 高く速く… 競い合い腕磨け

参加学生諸君にはいい思い出になったものと思います。もう一つ報道に関して言いますと、学連と密接な関係にある朝日新聞が、関西、東海両地域で全く扱いが無かったのは残念の極みです。第2回大会以降の扱いに関し、是非期待したいものです。残ったのは後援、協賛の問題で、折りしも全国各社リストラ策の真っ只中で、JAL ANA、ASの広報には断られました。以下の法人から後援を頂くことができました。

財団法人 日本学生航空連盟  
社団法人 日本航空機操縦士協会  
社団法人 日本滑空協会

医療法人 清水医院

この場をお借りし、改めてお礼申し上げます。

競技は第1回大会で、期間的にも十分でない中、気象条件にも恵まれたものとは言えませんでした。しかしながら、各校選手、サポート隊は、明らかに勝負にこだわりをみせ、出来れば優勝、何としても4校中の最下位だけは避けたいとの気迫のもと、連日熱戦を繰り広げてくれました。

初代優勝者は、少ないチャンスを物にした、立命館大学の山下良範君(3年生)で、彼のコメントに「競技は立同戦に続いて2回目でしたが、4大学対抗と言う事で(勝負への)意識を高く持てました」とあり、計画した者全員が目指した方向に、一途の光りが射したのではと思っています。ちなみに、団体優勝も立命館大学が手中にしました。

今大会は、準備期間が十分とは言えない中、第1回大会を開催することに意義を見出し、各自お忙しい中、時間を割いて頂き多大なご協力、ご努力を賜りました。厚くお礼申しあげます。

次回第2回大会は、関西大学が当番校となり、関関同立戦の益々の発展のため、4校力を合わせ、打倒関東を目指し有意義な大会にしたいと望んでいます。

同志社大学航空部の益々のご活躍をお祈りしますとともに、OB、OGの方々の大会会場へ足をお運びくださることをお願いし、出来れば現地で旧交を温めたいと思っています。

有り難うございました。

(競技結果は31ページに掲載あり)

関西のカレッジスポーツで伝統を誇る関西大、関大、関大、立命大のいわゆる「関西同立」4大学グライダー部1回定期戦がこのほど、京都・木曽川滑空場で行われた。各大学とも戦前から活動しているが、インカレなどの成績では関東勢に押され気味。選手たちが腕を磨く競技の機会を増やし、技術向上につなげようという合同強化計画が実現した。

# 関西同立 合同強化計画が 離陸

## グライダー 初の定期戦



定期戦で使われた木曽川河川敷一帯の空域（高度約600m。左は上昇してくるグライダー）

初代優勝者は立命大の山下 雅生（山下）だ。日本学生航空連盟の約60カ部、約1000名が参加。関西大、関大、立命大、関西学院大の4大学が合同強化計画で初の定期戦を開催した。関西大は、関西学院大、立命大、関西学院大の4大学が合同強化計画で初の定期戦を開催した。関西大は、関西学院大、立命大、関西学院大の4大学が合同強化計画で初の定期戦を開催した。

成果を挙げた。競技者対抗ということで勝敗は立戦に拘り、4大学とも喜ぶ姿が目立った。関西大の山下は、この大会で初の優勝を果たした。山下は、この大会で初の優勝を果たした。山下は、この大会で初の優勝を果たした。

### 一人乗りで600万円から

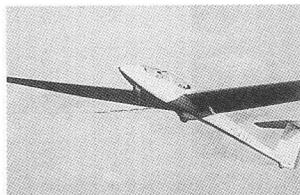
離す。上昇気流をうまくとらえれば、数千の円で済ませ、時速100km以上のスピードが出せる。日本学生航空連盟の田口昇副理事長（関大OB）は「常に進化の上昇気流など、自分自身の経験や研究で感じ取って飛ぶのがグライダーの醍醐味」という。機体はグラスファイバーがほとんど、30部がドイツ製。1人乗り（単座機）で600万円から1千万円と高価だが、耐久性は確

### グライダー

しなからの飛行。どれだけ速くまで飛ぶかという性能を「滑空比」で表す。30であれば、高度1000mから1000mまで飛ぶことができる。主翼に揚力を生ずる揚力と、プロペラやジェット機と同じ。ただ、動力がないため、基本的には降下



ワインチで巻くロープに引っ張られ、離陸したグライダー

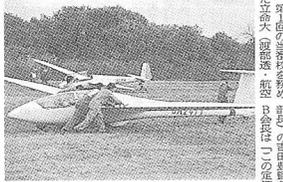


ワイヤロープに引っ張られ離陸するグライダー。阪神市の木曽川滑空場で、関西大のグライダー部員が練習中。機体は、ワインチで巻くロープに引っ張られ、離陸する。機体は、ワインチで巻くロープに引っ張られ、離陸する。機体は、ワインチで巻くロープに引っ張られ、離陸する。

# 関西4大学が空中戦の 海津でグライダー競技会

関西地方の四つの大学（関西大、関大、立命大、関西学院大）が、海津市の木曽川滑空場で初の定期戦を開催した。関西大は、関西学院大、立命大、関西学院大の4大学が合同強化計画で初の定期戦を開催した。関西大は、関西学院大、立命大、関西学院大の4大学が合同強化計画で初の定期戦を開催した。

中日新聞 2003.11.9朝刊



第1回関西同立定期戦で、離陸後の準備をする選手（木曽川滑空場）

第1回の定期戦を統一部長の田中俊彦監督が立命大、関大、関大、立命大の4大学が合同強化計画で初の定期戦を開催した。関西大は、関西学院大、立命大、関西学院大の4大学が合同強化計画で初の定期戦を開催した。

京都新聞 2003.11.22夕刊